

大学生が思春期の子どもたちに実施する 性教育に関する文献検討

清水 史恵*

要旨

【目的】大学生が思春期の子どもたちに実施する性教育に関する文献をもとに、大学生による性教育の現状や課題を明らかにし、思春期の子どもたちや性教育の実施者にとって学びの多い性教育となるよう今後の取り組みへの示唆を得る。

【方法】医学中央雑誌とCiNiiで、2012年以降の文献を対象とし、「性教育」「学生」をキーワードとして文献検索を行った。会議録、重複する文献、性教育の内容について記載のない文献を除き、大学生が行う性教育に関する9文献を対象とした。

【結果】主に高校生を対象者とし、教育職や医療職を目指す大学生が性教育を実施していた。性教育により、対象者の知識の獲得や自己の認識の変化につながっていた。大学生は、対象者を理解し、伝えることができた達成感を抱き、自己を見つめなおし、性教育の経験を将来に向けて役に立つととらえていた。大学生が性教育を実施するうえで、学校との調整、大学生の教育力の育成、研究においては、研究対象者の偏りや、学びに関する不十分なデータが課題であった。

【結論】学びの多い性教育にむけ、大学と学校との調整、大学生への事前事後教育の体制づくりを、大学のみならず他機関の協力も得ながら構築していくことが必要である。

Key words : 大学生、性教育、学び、文献検討

I. はじめに

国際連合教育科学文化機関（UNESCO）をはじめとする国際機関の共同により「国際セクシュアリティ教育ガイダンス（改訂版）」が出され、人間関係、人権、ジェンダーの理解なども含めた包括的性教育の重要性や、幼児期から生涯にわたっての性教育が必要であることが示されている（ユネスコ，2018/2020）。一方、日本においては、

小学校、中学校、高校において、学習指導要領に基づき、体育科、保健体育科や特別活動をはじめ、学校教育活動全体を通じた性教育が行われている（文部科学省，2022）。第二性徴が発現する小学校高学年ごろより高校の時期は、心身ともに大きく変化し成熟していく思春期である。思春期の子どもたちが、心身の変化に戸惑い、一人で悩みを抱える恐れもあり、彼らへの性教育は重要である。しかし、中学校3年間合計での性教育の時間数は7時間程度と（茂木ら，2022）、性教育にさかれる時間は短い。中学校や高校の教員は、性教育の

*京都看護大学

教材作成において困難を感じており、保健所や大学機関等との連携を求めている（斎藤ら，2015；村上ら，2016）。

短期大学生や大学生は、高校までの性教育が役立ったとあまり認識しておらず（森本，2015；忠津ら，2008）、避妊方法を学んでいるが正確な性知識を十分に持っていない（中澤，2019）。令和3年度の人工妊娠中絶件数は126,174件で、20歳未満について各歳で見ると、19歳が4,051件と最も多く、次いで18歳が2,466件となっている（厚生労働省，2023）。大学生が出産後、産まれてきた子どもを遺棄する事件も報道されている（産経新聞，2017）。これらの事実より、大学生への性教育の必要性は高いと考える。看護学系学部所属の大学生236名のうち86.9%の学生が大学における性教育を希望しているが（鈴木ら，2022）、大学における性教育についての指針は示されておらず、大学での性教育の実施率は10%あまりと低い（石井ら，2018）。

「健やか親子21（第2次）」において、思春期の性の健康を促進するための取組の一つとして、ピアサポートの推進があげられている（厚生労働省，2014）。西頭ら（2011）は、日本のセクシュアリティ教育について文献検討を行い、ピアエデュケーション、ピアカウンセリングでは、受講後、生徒の性に関する知識の正答率が上がったこと、性行動の意思決定能力や効力予期が高まり受講後3か月以上維持できていることなどの効果について報告している。宮内ら（2013）も、思春期におけるピアエデュケーション手法を用いた性教育に関する研究を概観し、思春期における性教育の一手法としてピアエデュケーションが有効であることを報告している。そのように、性教育の受け手である対象者にとってピアエデュケーションが有効であることが示されている。一方、5年一貫課程の看護学生を対象とした調査で、ピアエデュケーションは、性教育の実施者、つまりピアである学生にとっても、自らの性の知識や理解の増加を自覚する、セクシュアリティの捉え方の変化に気付

くなど、自己を肯定的に捉えなおすうえで有効であると報告されている（上田ら，2011）。西頭ら（2011）や宮内ら（2013）の文献研究では、性教育の実施者である大学生が活動を通してコミュニケーションスキルを向上させたという報告（植田ら，2004）のみが取り上げられていたが、性教育は、対象者のみならず実施者にとっても学びが多いと推測される。これらの文献研究から10年余りが経過しており、大学生が思春期の子どもたちに実施する性教育に関する研究も積み重ねられていると予測される。大学生が実施する性教育に関する知見を整理し、学びの多い性教育を実施するための示唆を得ることは意義がある。

II. 目的

大学生が思春期の子どもたちに実施する性教育に関する文献をもとに、大学生が実施する性教育の現状や課題を明らかにし、思春期の子どもたちや性教育の実施者である大学生にとって、より学びの多い性教育となるための今後の取り組みへの示唆を得る。

III. 方法

1. 用語の定義

大学生：看護学生や助産学生が思春期の子どもたちへの性教育を実施することが予想されるため、本研究では、大学で学ぶ学生だけではなく、学校教育法において大学の一種である短期大学で学ぶ学生も含むこととした。

2. 対象文献の選定

医学中央雑誌およびCiNiiにおいて、「性教育」「学生」をキーワードとして文献検索を行った（検索日：2023年7月29日）。2012年以降の文献を対象とした。結果、医学中央雑誌では354件、CiNiiでは202件がヒットした。会議録、重複する文献、性教育の内容について記載されていない文献を除き、大学生が実施する性教育に関する文献を抽出

し、計9件を分析の対象とした。

3. 分析方法

文献を精読し、性教育の対象者、実施者、性教育の内容、大学教員の関わりに関する記述を抜粋した(表1)。研究目的や方法、性教育における対象者や実施者である大学生の学び、性教育における実践や研究における課題についての文献内の記述を抜粋した(表2)。性教育における対象者の学び、実施者である大学生の学び、性教育における実践における課題、研究における課題、それぞれについて文献内の記述内容を類似性相違性の点から比較検討した。

4. 倫理的配慮

引用文献を明確に記述し、著作権を侵害しないようにした。

IV. 結果

1. 文献の概要

対象とした9文献の学問分野は、看護学6件、教育学3件であった。論文の種類は、原著2件、研究報告4件、実践報告1件、短報1件、解説1件であった。解説1件を除いた8文献の研究デザインは、質的研究6件、量的研究と質的研究の組み合わせ2件であった。文献の発行年の分布に偏りはなかった。

2. 大学生による性教育の現状

1) 性教育の対象者や教育内容

性教育の対象者は、大学生と高校生1件(加藤ら, 2018)、高校生5件(加藤ら, 2021; 郡司, 2019; 中山ら, 2015; 岡本, 2013; 坪川ら, 2013)、中学生1件(志村ら, 2017)、中高生1件(田邊, 2020)、小学生1件(佐藤ら, 2017)であった。実施者は、1件は大学生という記載のみで詳細は不明であったが(加藤ら, 2018)、8件においては、教育職や医療職を目指す大学生であった。

教育内容は、大学生が、講義、クイズ、劇、ロールプレイを実施し、児童生徒のグループワークに大学生が加わる形式であった。また、妊婦体験

やベビー人形の抱っこ(佐藤ら, 2017; 志村ら, 2017; 中山ら, 2015)、担任教員の協力も得ながら、実際に胎児心音を聞き(佐藤ら, 2017)、児童生徒が体験できる内容を多く含むものであった。

高校生を対象としたグループワークにおいては、男女別にグループを編成する(中山ら, 2015)、同性の大学生が担当する形式(岡本, 2013)にしている場合もあった。

2) 大学教員の関わり

性教育の実施前、実施中、実施後の大学教員の関わりについて記載されていた。実施前には、ピア養成講座や事前指導を実施する4件(加藤ら, 2021; 加藤ら, 2018; 岡本, 2013; 坪川ら, 2013)、大学生による性教育の内容の確認や助言をする4件(田邊, 2020; 志村ら, 2017; 岡本, 2013; 坪川ら, 2013)、参加する大学生の配置を調整する1件(田邊, 2020)、大学生に事前課題を課す1件であった(志村ら, 2017)。実施中は、学生と一緒に性教育を実施する1件(郡司, 2019)、助言する1件であった(田邊, 2020)。性教育を実施後の関わりとしては、性教育終了後に反省会を開催し振り返りをし(佐藤ら, 2017; 岡本, 2013)、3~4か月後にピアエデュケーションフォローアップ研修を行っているケースもあった(岡本, 2013)。

3) 性教育での学び

性教育を受けた対象者への質問紙調査や感想文の分析により、彼らの学びについて明らかにされていた。性教育を受けた対象者の学びの内容としては、妊娠や性感染症などに関する知識の獲得があり(加藤ら, 2021; 坪川ら, 2013)、性教育で得た新しい知識については、その内容よりも活用について高校生の感想文に記述されていた(郡司, 2019)。高校生は、大学生による性教育を受講後、「性交を求められた時相手に自分の気持ちを伝える自信がある」「性交の前に妊娠について考える」「コンドームを使ってもらう自信がある」のように自己に関する認識が肯定的になっていた(加藤ら, 2021)。また、性について我が事として

表 1-1 性教育の概要

No	文献タイトル(著者、発行年)	性教育の対象者	実施者	性教育の内容	大学教員の関わり
1	高校生を対象とした大学生のピアエデュケーション活動による性教育のあり方(加藤ら, 2021)	高校2年生女子34名	養護教師を目指す大学生 女子11名(4年生4名、3年生3名、2年生2名、1年生2名) 生徒6~7名のグループにピア学生2名が加わる	・対象の高校生が保健科目で既習内容を考慮した授業の発展的な学習 ・「ライフライン(人生設計)を描く」「性の場面設定したロールプレイ」の45分間を2回を2日間にわたり実施	<u>実施前</u> ・ピア養成のためテキスト教材を使用し、90分×3回の事前指導を実施
2	看護学生が多学年協働で行う中高生への性教育活動に参加することの意義(田邊, 2020)	中学生	大学の看護女子学生	・計110分/回 ・思春期の特徴や心と身体の発達等に関する知識を伝えるとともに、命の大切さや自己受容・他者受容の大切さについてともに考え、主体的な行動変容を促す ・2002年度より、大学が自治体からの委託を受け、ボランティア活動として複数回実施してきている	<u>実施前</u> ・参加する看護学生の配置を考える ・各クラスにクラスリーダーを配置し、円滑に活動を展開できるよう、実施準備から終了まで、責任をもってマネジメントする役割を課す ・事前にデモンストレーションを行い、教員が内容を確認し、その際、性教育で行うプログラムのねらいを確認するとともに、学生自身が性や生に関する自身の価値観に気付くことができるよう関わる <u>実施中</u> ・教材の見せ方や中高生との関わり方等、気付いた点があれば参加学生に助言する
3	バフォーマンスを用いた性教育講演会の学習効果ー高校3年生・大学生・授業者の弁証法的関係性に着目してー(郡司, 2019)	高校3年生130名	教育心理学専攻の大学生7名	・性教育講演会 1回(時間の記載なし) ・現実味のあるイメージしやすい男女の恋愛シチュエーションを大学生がバフォーマンスする形式で、高校生の拳手の反応によりストーリーが即効的に変化する	<u>実施中</u> ・性教育講演会を大学生7名とともに実施
4	ピア・エデュケーション場面の現象分析: 大学生と高校生の観察力と伝達力の検証: 活動後の感想にあげられた内容と映像場面の振り返りから(加藤ら, 2018)	高校生と大学2年生	大学生延べ32名 (フィールドグループワークと地域との協働IIを選択した学生、看護研究IIで高校生の性教育に関する評価を研究テーマとした学生、ピア・サークルの学生)	・高校4校を訪問し、50~100分の授業を担当 ・大学2年生の1クラスで20分間の模擬授業を担当 ・寸劇、グループワーク、コミュニケーションゲームなどで構成	<u>実施前</u> ・ピアカウンセリング養成講座(基礎的なコミュニケーションスキルとセクシュアリティの概念を学ぶ)を4日間実施
5	小学生を対象としたいのちの授業を行った看護学生の学び(佐藤ら, 2017)	小学生5年生の男女63名	4年制看護大学の看護学生1~3年生14名 (母性看護学に興味がある学生、助産師を志す学生、命の授業に興味のある学生)	・1回90分間の授業(45分間講義と45分間体験) ・動画視聴 ・担任教員の幼少期から成人に至る写真を見せる ・妊娠中の教員の胎児心音を超音波ドップラーで聴取した心音を聴いてもらう ・ベビーマッサージ、おむつ交換、抱っこ、バイタルサイン測定の体験 ・妊婦体験 ・9年前から小学校の要望に応えるものとして毎年実施	<u>実施前・実施中</u> ・代表と副代表学生と教員が、小学校の校長やクラス担任と会い、命の授業の概要を説明し、正式に実施の許可を得る ・授業の準備から終わりまでオブザーバーとして参加 ・母性看護学教員は、いのちの授業を実施する学生が「異年齢の対象を理解し対象のニーズに合った授業を行うこと」「対象にとって最も学習効果の高い方法で授業を企画・構成すること」「いのちの授業を通じて看護に興味を持つ」「看護学生自身が自己の価値に気づく」の4つに焦点を当ててサポート <u>実施後</u> ・授業実施の反省会

表 1-2 性教育の概要

No	文献タイトル (著者, 発行年)	性教育の対象者	実施者	性教育の内容	大学教員の関わり
6	男子看護大学生が行う中学校での性教育の効果 (志村ら, 2017)	中学生	看護大学生男女	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校2校で実施 ・ 各回計2時間 (講話40分、大学生担当のグループ教育40分、まとめ20分) ・ 妊婦体験、赤ちゃん人形の抱っこ体験 ・ 「今自分がHIVに感染したら」「今妊娠したら」などを自由に話し、自分自身のライフプランを立て、お互いに発表 	<p>実施前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指導案の確認 ・ 赤ちゃんの首の支え方や抱っこの方法を学ぶ、生徒がやさしく丁寧に赤ちゃんとふれあうことができるよう声掛けや配慮について考える、生徒からよく質問される内容への対応策を練る、対象者の気持ちに近づけるよう自分の中学時代を振り返るということを、事前学習として課す
7	高校生を対象とした性教育を実施した助産学生の学びと課題 (中山ら, 2015)	高校生2年生	短期大学で助産学を学ぶ学生8名 男女各4グループ編成、1グループを助産学生1名が担当	<ul style="list-style-type: none"> ・ 計1時間15分/回 ・ 男子生徒対象は、受精の過程と妊娠経過、女性の体の負担、若年妊娠のリスク、もし相手を妊娠させてしまったら、相手を思いやるとはどんなことか、更年期について ・ 女子生徒対象は、月経、精子と卵子の寿命、受精時期・タイミング、妊娠時の体重増加、出産、結婚、ライフプラン、高校生の恋愛、思春期 ・ 共通した内容は、妊娠、ペビ人形を使っての抱き方や赤ちゃんの重さの体験、避妊、性感染症、男女の恋愛や性に対する考え方の違い 	記載なし
8	医療系大学生がピアとなつて実践した高校生を対象とするピアエデュケーション活動 (岡本, 2013)	高校1年生	医学部医学科・看護学科の学生を中心とした大学生 グループは高校生6、7名に同性の大学生1、2名で構成	<p>実施前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校1校に年に1回実施 ・ 1回100分 ・ グループワーク ・ 7年目の活動 	<p>実施前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ピアエデュケーター養成研修会において、大学教員や産婦人科医師の講義 (ピアエデュケーションや思春期の性について) やコミュニケーションスキルの演習、高校養護教諭からピアエデュケーション実施校の紹介 ・ 研修会受講後から指導案や媒体の検討作成をし、養護教諭や学校責任者を含めて協議 <p>実施後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ピアエデュケーション終了直後に反省会 ・ 実施3~4か月後に、ピアエデュケーターフォローアップ研修を行い、活動の流れを振り返り、養護教諭より実施校における活動の評価の紹介、ピアエデュケーター同士でグループワーク
9	性教育における助産専攻学生による高校生に対するピアエデュケーションの効果 (坪川ら, 2013)	高校生 初年度は全学年、2年度以降は1年生対象	助産専攻の大学生 助産実習で3~5例の分娩介助経験がある 助産専攻学生2~3名が1学級を担当	<ul style="list-style-type: none"> ・ HIV/AIDS予防・性教育の授業 (2時間) ・ 「自分で決める性行動~望まない妊娠と性感染症を防ぐために」をテーマとし、クイズやロールプレイングを組み込んだ全学級共通プログラム 	<p>実施前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HIVを含む性感染症について、思春期の性行動の実態について、共通プログラムについて3~4時間の説明 ・ 学生が作成したシナリオに誤りに誤りがないかを確認

表2-1 性教育での学びと課題

No	文献タイトル(著者, 発行年)	研究目的	研究方法	性教育での学び	課題
			①対象 ②データ収集方法 ③データ分析方法		
1	高等学校における性教育を効果的に行うために、養護教諭を目指す学生をピアエとして、高校生にピアエデュケーションを実施し、そのあり方(加藤ら, 2021)	高等学校における性教育を効果的に行うために、養護教諭を目指す学生をピアエとして、高校生にピアエデュケーションを実施し、そのあり方について検討する	①高校2年生女子34名 ②受講前(2週間前)と受講後(後の自己記入式質問紙調査と受講直後の高校生の振り返りシート) ③Wilcoxon検定と質的内容分析	<p>高校生の学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・妊娠・性感染症に関する知識に関する正答率の向上 ・受講前後で「性交を求められた時相手に自分の気持ち伝えられる自信がある」「性交の前に妊娠について考える」「コンドームを使ってもらう自信がある」において有意差あり、自己に関する認識・行動について肯定的な回答が増加 <p>大学生の学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生や性に関する考えの深まりや価値観や興味・関心の広がりを実感 ・有意義な教育を行うことを意識し、経験を基盤とした自己成長に努め、その結果、他者に伝える経験がもたらす達成感や良好な人間関係構築への自信を得た ・低学年は先輩との交流で大学生生活の不安軽減ができ、上級生は先輩としての役割の認識と遂行する上で苦悩を抱えていた 	<p>実践における課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感染症への恐怖感で終わらず、予防できる疾患としての理解への指導の工夫が必要である ・仲間に入りにくい生徒の存在も考え活動する必要がある <p>研究における課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1校の女子のみが対象であることと支援したピア学生も全員女性という性別の偏りがある <p>実践における課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員は、学生に主導権を握らせながら、適宜、悩みの傾聴や助言を行い、学生が安心して活動を展開できる機会を設けることが重要 ・クラスリーダーの経験に偏りを生じさせていたため、クラスリーダーの経験がない看護学生への調査を実施
2	看護学生が多学年協働で行う中高生への性教育活動に参加したことへの意義(田邊, 2020)	看護学生が多学年協働で行う中高生への性教育活動に参加して感じたことや考えたことを明らかにする	①複数回活動に参加経験のある看護大学生女子4名 ②活動を通して感じたことや考えたことについてインタビュー ③質的分析	<p>高校3年生を対象とした性教育講演会について、参加者である大学生及び高校3年生の学習効果を弁証法的視点で分析し、その学習効果を検討することで、教員養成における性教育指導に関するプログラム開発のための知見を蓄積する</p>	<p>研究における課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講演の場における弁証法的やり取りの結果である感想の分析に留まっておらず、そのプロセスを具体的に記述できなかった
3	パフォーマンスを用いた性教育講演会の学習効果—高校3年生・大学生・授業者の弁証法的関係性に着目して—(郡司, 2019)	パフォーマンスを用いた性教育講演会の学習効果—高校3年生・大学生・授業者の弁証法的関係性に着目して—(郡司, 2019)	①高校生106名と大学生7名 ②高校生には事後アンケート調査、大学生はSNSでの感想文の提出 ③単純集計とテキストマイニング	<p>大学生の学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・性教育講演の内容よりも手法に言及する語が多く抽出 ・講演で得た新しい知識は、その内容よりも活用について記述 ・「楽しい」「ストーリー」といったパフォーマンスな場の状況についての語が抽出 ・「生徒」「大学生」「先生」といったその場の役割に言及する語が抽出 	<p>実践における課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピア活動の初学者には、バラフリーズとグループワーク、小集団の進め方を強化し、困った時に対処法を講じ、想定内でピア活動を進める必要がある
4	ピア・エデュケーション場面の現象分析：大学生と高校生の観察力と伝達力の検証：活動後の感想にあげられた内容と映像場面の振り返りから(加藤ら, 2018)	大学生と高校生や、大学生間で起きている現象を再帰的な姿勢で分析し、相互の学びについて観察力と伝達力に焦点をあて、明確化する	①大学生16名 ②大学生の高校生へのピア活動後の感想の記述と映像場面 ③アンケート調査からピア活動における学び、悩み、ピア活動で感じたこととその理由を分析、映像場面から、観察力(高校生やピア大学生間における言動、姿勢、表情、高校のクラスの雰囲気など)と伝達力(声の出し方、大きさ、アビールの仕方、バラフリーズによる確認など)を検証	<p>大学生の学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知識を持たない高校生に伝えることの難しさ ・高校の特色やクラスカラーの違いから、アプローチの仕方(リズム、スピード、声かけなど)を変化させる必要性 ・学校の先生の導き方で、高校生の考える力の引き出し方が違う事を知り、自分自身の学習のあり方として、時間配分やバラフリーズに課題があることを実感 ・同じ内容でクラスごとに盛りだくさんでも、生徒の反応の違いから理解しているかはお互いの相乗効果の上で学習は成り立つ ・ピア活動で仲間と協働することで自らを振り返り、今までと違う何かを発揮している自分に気づく ・自覚感情を自覚 ・伝えられたという達成感 	<p>実践における課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピア活動の初学者には、バラフリーズとグループワーク、小集団の進め方を強化し、困った時に対処法を講じ、想定内でピア活動を進める必要がある
5	小生を対としたいのちの授業を行った看護学生の学び(佐藤ら, 2017)	看護学生が小生に対して行ういのちの授業の実践を通して得た学生の学びを報告する	①看護学生14名 ②いのちの授業を実施後、学生に授業実施の学びについて自由に語る場を設けて、録音し、逐語録とする ③質的分析	<p>大学生の学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的を明確に持って伝える必要性 ・メンバーが自主的に参加し、協力し意見を出し合い、授業内容が洗練し順序性が明確になる過程 ・プロや熟練者の技と語り ・小学生の純粋な反応、早い変化 ・幸せとは言えない子供の側面 ・看護学生がこんなことができるんだという新たな発見といのちについて小学生に伝えることができるという確信 	<p>実践における課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が学習者分析の視点に沿って小学生の情報を得て、学習目標を設定するよう促すという大学教員側の課題

大学生が思春期の子どもたちに実施する性教育に関する文献検討

表2-2 性教育での学びと課題

No	文献タイトル (著者, 発行年)	研究目的	研究方法 ①対象 ②データ収集方法 ③データ分析方法	性教育での学び	課題
6	男子看護大学生が行う中学校での性教育の効果 (志村ら, 2017)	男子看護大学生が中学生の性教育に関わることの効果を明らかにする	①男子学生4名 ②中学生への関わりを観察と男子学生4名に20分間のフォーカスインタビューを実施 ③質的分析	<u>大学生の学び</u> ・中学生が自分の話を一生懸命に聴いてくれた嬉しかった ・この経験が自分の役に立っているという自覚につながった ・今後も専門的に語れるように勉強したいと思った	<u>実践における課題</u> ・初めて実践を行った男子学生も事前教育を充実すること、自信を持ち、中学生徒にも効果的であった ・女子学生に比較して、男子学生は寡黙で、熱心に思いを語るということは苦手なようであり、今後、男子学生の性教育者としての育成への課題として検討する
7	高校生を対象とした性教育を実施した助産学生の学びと課題 (中山ら, 2015)	助産学生が高校生を対象とした性教育を効果的にするために、実施した内容と方法について分析し、今後専門知識を持った助産学生が行う効果的な性教育のあり方について検討する	①性教育を実施した助産学生6名 ②半構造的質問紙調査 ③質的分析	<u>大学生の学び</u> ・高校生と関わり感じることとして、高校生の性質、新たな発見、助産学生の実施にあたっての思いがあった ・高校生の性質とは、特に男子は複雑と感じたなど、性教育の場での高校生の反応を助産学生がどうとらえたかということである ・新たな発見とは、学生が高校生に性教育を実施して、高校生なりに考えているなど高校生のことがわかったことや、性教育を受け性感染症を怖いと感じるように変化したといった実施後の高校生の変化を示すもの ・助産学生の実施するにあたっての思いとは、自分の勉強になった、男子高校生とどう話したらいいかわからなかった、人に伝えるのが難しいといった思いである	<u>実践における課題</u> ・性教育の依頼者側である学校教員と助産学専攻の教員間でニーズの調整の場を設けることが必要。助産学生が異性への理解を深められるよう学内での教育が必要である ・学内でのデモンストラレーションの時間を設ける必要がある <u>研究における課題</u> ・授業後の高校生の意識や生活の変化を調査をしておらず、授業内容の妥当性がいえない
8	医療系大学生がピアアとなって実践した高校生を対象とするピアエデュケーション活動 (岡本, 2013)	解説のため記載なし	①助産専攻学生が行った性教育の授業を受講した高校生860人 ②感想文 ③質的記述的分析	<u>大学生の学び</u> ・今の高校生が性について、また自分のことについて、どのような考えを持っているのを知ることができた ・高校生の頃の自分を振り返り、自分が抱えている感じ方や考え方がどのように変化しているのかなどを見つめなおす良い機会になった ・対話の大切さについて学ぶことができた ・将来医療職に携わる際に必要なコミュニケーション能力を養う経験になった ・貴重な経験ができた	<u>実践における課題</u> ・年一回開催のため、段階を追った実施が難しい ・活動の発展に向けて、ピアエデュケーションの活動の実際を他の高校の教諭が見学する機会を設けることや、企画側である大学と行政及び教育機関の意見や情報を交換して相互理解が必要
9	性教育における助産専攻学生による高校生に対するピアエデュケーションの効果 (坪川ら, 2013)	助産専攻学生が行う思春期性教育におけるピアエデュケーションの効果を確認する	①助産専攻学生が行った性教育の授業を受講した高校生860人 ②感想文 ③質的記述的分析	<u>大学生の学び</u> ・知識の獲得や認識の深まり、自分を守ることの意識化、性行動への意志の芽生え、大学生から教わることへの評価、性感染症への認識の強まり、妊娠・命への新たな認識、パートナーや親との関わりの見直し、その他の7つのカテゴリが抽出された ・高校生女子には、自分を大切に守る、自分事として考える、望まない妊娠の防止を考えるきっかけ、高校生男子には、相手への思いやりを考えるきっかけになる	<u>研究における課題</u> ・学校側の性教育に関する理解や取組みの差が学生の学びに及ぼす影響など、環境による学びへの影響も検討課題

考えるようになっていた（岡本，2013；坪川ら，2013）。自分や相手を大切にしている認識や、パートナーや親との関わりを見直しにつながっていた（坪川ら，2013）。

性教育の実施者である大学生の学びは、大学生へのインタビューや質問紙調査や感想文の分析により明らかにされていた。大学生の学びとして、高校生が性についてどんな考えを持っているのかといった対象者の理解（中山ら，2015；岡本，2013）、知識を持たない高校生に伝えることの難しさ（加藤ら，2018；中山ら，2015）、教員や熟練者の導き方で小学生や高校生である相手の反応が異なることの気づきがあった（加藤ら，2018；佐藤ら，2017）。性教育の経験は、良好な人間関係構築への自信（田邊，2020）、中高生に意図したことを伝えることができたという達成感（田邊，2020；加藤ら，2018）や小学生にいのちについて伝えることができるという確信（佐藤ら，2017）、専門的に語れるように勉強したいといった大学生の今後への意欲（志村ら，2017）につながっていた。また、大学生にとって、性教育の経験は、自己の生や性に関する考えが深まり（田邊，2020）、自分の感じ方や考え方の変化といった自分を見つめなおす機会となっていた（岡本，2013）。大学生は、高校生と関わり、パラフレーズに課題があると自己の課題に気づいていた（加藤ら，2018）。大学生は、目的を明確に持ち伝える必要性（佐藤ら，2017）、対話の大切さ（岡本，2013）を学んでいた。大学生は、性教育を実施した経験を将来医療職に就く上で必要なコミュニケーション能力を養う経験であり（岡本，2013）、自分の役に立つととらえていた（志村ら，2017；中山ら，2015）。大学生は、性教育活動グループの多学年の学生間で協働する中で、先輩として後輩をサポートし全体を調整する必要性に気づいていた（田邊，2020；佐藤ら，2017）。

3. 大学生による性教育における課題

1) 実践における課題

大学生が性教育を実施するという実践における

課題は、性教育を提供する大学と性教育を希望する学校間の調整に関することと大学生の教育力の育成に関することに大別できた。

調整に関することとしては、教育を受ける児童生徒の情報を得て、大学生が学習目標を設定できるよう、互いのニーズ調整や相互理解の場を設ける必要性や（中山ら，2015；岡本，2013）、学生が学習者分析の視点に沿って小学生の情報を得て、学習目標を設定するよう促すという大学教員側の課題があった（佐藤ら，2017）。活動の発展に向けて、ピアエデュケーションの活動の実際を他の高校の教諭が見学する機会を設けることも課題として挙げられていた（岡本，2013）。

大学生の教育力の育成に関することとしては、高校生が感染症への恐怖感を抱くだけでなく、予防できる疾患としての理解にむけた指導の工夫が必要であることや仲間に入りにくい生徒の存在も考えながら活動を進めていくという課題があった（加藤ら，2021）。大学教員は、学生が困った時に対処法を講じ（加藤ら，2018）、学生に主導権を握らせながら、悩みの傾聴や助言を行い、学生が安心して活動を展開できる機会を設けることが重要であった（田邊，2020）。助産学生は、高校の男子生徒に対してどう話してよいかわからないと戸惑いを抱いており、異性への理解を深められるように大学内での教育が必要であった（中山ら，2015）。志村ら（2017）は、女子大学生に比較して、男子大学生は寡黙で、熱心に思いを語るということは苦手なようであり、今後、男子大学生の性教育者としての育成への課題として検討していく必要性を述べていた。

2) 研究における課題

研究における課題としては、研究対象者の偏りとデータの不十分さがあった。女性のみであるという性別の偏り（加藤ら，2021）、クラスリーダー経験者のみであるという経験の偏り（田邊，2020）というように、研究対象者の偏りが研究における課題としてあげられていた。分析するデータが感想文であることで学びのプロセスの詳細が

明らかにならない(郡司, 2019)、授業後の高校生の意識や生活の変化を調査していないことで授業内容の妥当性まで言及できないという(中山ら, 2015)、データの不十分さに起因する課題があげられていた。学校側の性教育に関する理解や取組みの差が学生の学びに及ぼす影響など、環境による学びへの影響を調査する必要性もあがっていた(坪川ら, 2013)。

V. 考察

大学生が実施する性教育の現状をふまえ、性教育の受け手である対象者や実施者である大学生の学びがより多くなるために、今後、どのような取り組みが必要かについて考察する。

1. 大学生が実施する性教育による学び

性教育の対象者は、性教育を受けることで、妊娠や性感染症に関する知識の獲得や自己の認識が肯定的に変化していた(加藤ら, 2021)。また、性について我が事として捉えるようになっていた(岡本, 2013; 坪川ら, 2013)。それらは、大学生からピアエデュケーションを受けた高校生の受け止めとして、自分は自分でいい、自分について考える、自分の意見を大切にするという意見があったというこれまでの報告(安達ら, 2006)と類似する。

一方、性教育を実施した大学生は、対象者の理解(中山ら, 2015; 岡本, 2013)、自己の生や性に関する考えを深め(田邊, 2020)、自分の考え方の変化を見つめなおしていた(岡本, 2013)。性のピアエデュケーターとして活動した看護学生が、ピアエデュケーションの体験で、自らの性の知識や理解の増加を自覚し、自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づいたという上田ら(2011)の報告と類似する。

それに加え、大学生は、性教育を実施することで、コミュニケーションにおける自己の課題に気づき(加藤ら, 2018)、必要なコミュニケーション能力を養っていると認識していた(岡本,

2013)。畠山ら(2017)は、思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動がピアカウンセラーに及ぼす影響として、複数回ピア活動を経験することでコミュニケーション技術が身に付き、看護実習や日常生活においても、それらのスキルを応用できる可能性について言及している。加藤ら(2018)は、複数の高校を訪問し性教育を経験した大学生を対象としていた。岡本(2013)は、年一回の実施ではあるが継続した性教育の活動で、実施前後の研修を様々行っていることを報告していた。それらのことにより、性教育の実践や事前事後の研修を通し、多くの経験を積み、大学生がコミュニケーションに意識を向けることにつながったと考える。大学生のコミュニケーションに関する学びの詳細をみると、プロや熟練者の語り(佐藤ら, 2017)、専門的に語る(志村ら, 2017)、将来医療職に携わる際に必要なコミュニケーションの能力(岡本, 2013)というように、自身が将来目指す専門職を意識したコミュニケーションの学びをしていると考えられる。

また、性教育活動において学生間で協働する中で大学生の学びが報告されていた(田邊, 2020; 佐藤ら, 2017)。大学生は、活動において、性教育の受け手である対象者との関わりだけではなく、ともに活動する実施者間での関わりを積み重ねることで、大学生同士で協働していくことも学んでいることを示している。

これまでの報告と同様、性教育の対象者と実施者ともに、多くの学びを得ていることが明らかにされていた。大学生にとって、自らが主体となり、事前事後の研修を受けながら、継続して性教育を実施していくことの意義が大きいことが示されている。

2. 今後求められる取り組み

1) 性教育を実施する大学生の教育力の育成

課題として、対象者の理解、異性対象者の理解、対象者への指導の工夫、男子学生の語る力を伸ばすといった大学生の教育力の育成にすることがあがっていた。今回対象とした9文献におい

て、性教育の活動の位置づけとしてボランティア活動であるものも含まれていたが、子どもたちへの性教育の質を保証するため、大学教員は実施前に学生に丁寧に関わっていることが文献から読み取れた。対象文献において、大学教員が性教育の実施前から終了後まで大学生に教育的に関わっていたが、性教育の実施後の教員の関わりの記載は少数であった。実施後の関わりの記載漏れの可能性もあるが、事後の関わりがあまり行われていないことも考えられる。ピアカウンセリング活動を継続していくうえで、ピアカウンセリングがうまくいったという実感、仲間の存在、同じ仲間以外の存在、参加は自由であることが重要な要素である(高村, 2015)。うまくいったという実感をもてるよう、性教育の実施を振り返り、次回に向けて、対象者の理解や対象者が参加しやすい工夫ができるよう、大学生の力を育成する場を提供することが必要と考える。大学生の女子学生が異性である対象者の理解が難しく、高校の男子生徒に性教育を行う難しさが述べられていた。性教育に男子大学生の参加を促し、男子大学生の協力を得ることも一策ではあるが、性活動の活発化がみられる高校女子が性に関する理解について男子より低い事実など(穂迫ら, 2017)、性別による高校生の性に関する理解について学ぶ機会を作ることも必要である。実施前後にピア養成の研修を学内の教員で実施することが難しければ、学外でピア養成の研修を受講できるようにするなど、学外のNPO、看護協会や助産師会などのサポートを得ることが必要である。

2) 性教育を提供する大学と性教育を希望する学校との連携体制の構築

課題として、大学生が性教育を実施するうえで、性教育を提供する大学と性教育を希望する学校との調整があがっていた。それらの課題を挙げている岡本(2013)や佐藤ら(2017)の文献における性教育の活動は、7年、9年と長期にわたるものであり、継続的に大学と学校間を調整していく必要があることを示唆している。高村(2015)

は、ピアカウンセリング活動を支える仕組みとして、ピアカウンセリング事業の立ち上げから実施に関係する諸機関の連携調整を担う役割としてピアコーディネーターを紹介している。今回分析対象とした文献においては、大学教員が、学校との連絡調整をすべて行い、コーディネーターの役割も担っていた。日本家族計画協会主催でピアコーディネーターセミナーが毎年開催されている。教育委員会や地域にピアコーディネーターの有資格者が増加し、学校、大学、コーディネーター間で連携体制を構築できることが期待される。

3) 研究の推進

西頭ら(2011)や宮内ら(2013)の文献研究から約10年が経過しているが、彼らが課題としていたピア・エディケーションにおける明確な理論、評価方法は構築されておらず、実際の性行動に対する行動変容に関する研究も今回の9文献には含まれていなかった。研究が大きく進展しているとはいいがたい状況である。しかし、今回対象とした文献において、性教育講演会を高校生と大学生の共同という観点から検討する(郡司, 2019)、インタビューだけではなく映像をデータとして用い観察力と伝達力を場面分析から検証するというように(加藤ら, 2018)、わずかではあるが研究方法の広がりがみられている。

研究における課題として、研究対象者の性別や経験の偏りと学びに関するデータが不十分であることがあげられていた。研究対象者の偏りを減らすには、研究対象者数を増やし、様々な背景の学生を対象とする必要がある。そのためには、大学生による性教育が広く認知される必要がある。教育職や医療職の大学生が、一般の大学生にピアとして性教育を行い、大学生一般にピアの活動を広めることも一つの方法である。また、大学生による性教育を広めるためにも、性教育に関する研究を積み重ね、論文として公表していく必要がある。

VI. 結論

大学生が思春期の子どもたちに実施する性教育に関する文献をもとに、大学生が実施する性教育の現状や課題を明らかにし、より学びの多い性教育となるための今後の取り組みへの示唆を得ることを目的に、大学生が行う性教育に関する9文献を対象として分析を行った。

結果、主に高校生を対象者とし、教育職や医療職を目指す大学生が性教育を実施し、性教育により、対象者の知識の獲得や自己の認識の変化につながっていた。性教育の実施者である大学生は、対象者の理解、伝えることができた達成感を抱き、自己を見つめなおし、性教育の経験を将来医療職に就く上で必要なコミュニケーション能力を養う役立つ経験ととらえていた。先輩として後輩をサポートし全体を調整する必要性に気づき、性教育の活動において学生間で協働するということを学んでいた。大学生が性教育を実施するうえで、大学と学校との調整、大学生の教育力の育成という課題があった。研究においては、研究対象者の性別や経験の偏りや不十分なデータという課題があった。

大学生が性教育を実施し多くの学びを得るためには、大学と学校との調整、大学生への事前事後教育の体制づくりを、大学だけではなく、他機関の協力も得ながら構築していくことが必要である。

利益相反

本研究は、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

安達久美子, 高田昌代, 西澤由季他. (2006). ピアエデュケーションを用いた性教育に対する高校生の受け止め方. 神戸市看護大学紀要, 10, 33-42.

郡司葉津美. (2019). パフォーマンスを用いた性教育講演会の学習効果—高校3年生・大学生・授業者の弁証法的関係性に着目して—. 国士館人文学, 51, 1-13.

畠山美怜, 笹野京子, 長谷川ともみ. (2017). 思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動がピアカウンセラーへ及ぼす影響についての文献研究. 富山大学看護学会誌, 17 (1), 39-48.

穂迫享子, 但馬まり子, 宮本雅子他. (2017). 性別にみた高校生の性に関する理解と性教育のあり方の検討. 第47回日本看護学会論文集ヘルスプロモーション. 39-42.

石井里佳, 木山慶子. (2018). 学習者からみたよりよい性教育についての一考察—大学生における性教育の既習状況と学習ニーズに着目して—. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 53, 79-87.

加藤千恵子, 永谷智恵, 石川貴彦他. (2018). ピア・エデュケーション場面の現象分析：大学生と高校生の観察力と伝達力の検証—活動後の感想に挙げられた内容と映像場面の振り返りから—. 地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報, 2 (36), 1-9.

加藤和代, 大平曜子, 米野吉則. (2021). 高校生を対象とした大学生のピアエデュケーション活動による性教育のあり方. 兵庫大学論集, 26, 109-119.

厚生労働省. (2023). 令和3年度衛生行政報告例の概況.

Retrieved from: https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei_houkoku/21/dl/gaikyo.pdf (閲覧日：2023年8月11日)

厚生労働省. (2014). 「健やか親子21 (第2次)」について 検討会報告書. Retrieved from: <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyou-kintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000045655.pdf> (閲覧日：2023年10月29日)

- 宮内彩, 佐光恵子, 鈴木千春他. (2013). 思春期における性教育としてのピアエデュケーションに関する研究動向. 思春期学, 31 (2), 243-251.
- 文部科学省. (2022). 学校における性に関する指導及び関連する取組の状況について. Retrieved from: <https://www.mhlw.go.jp/content/11121000/000910047.pdf> (閲覧日: 2023年10月29日)
- 森本美佐. (2015). 母子保健対策としての性教育—思春期からの性教育の評価と課題—. 奈良文化女子短期大学紀要, 46, 113-119.
- 村上道子, 赤井由紀子. (2016). 学校現場で助産師が行う性教育のあり方—教員の質問紙調査から—. 母性衛生, 57 (2), 410-414.
- 中山美香, 本島幸子, 北林ちなみ. (2015). 高校生を対象とした性教育を実施した助産学生の学びと課題. 飯田女子短期大学紀要, 32, 195-204.
- 中澤智恵. (2019). 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題. 日本性教育協会(編)「若者の性」白書. 第8回青少年の性行動全国調査報告. 東京: 小学館, 90-107.
- 西頭知子, 佐々木くみ子. (2011). 日本の若者の性とセクシュアリティ教育の現状に関する文献検討. 大阪医科大学看護研究雑誌, 1, 34-42.
- 岡本麻代. (2013). 医療系大学生がピアとなって実践した高校生を対象とするピアエデュケーション活動. 妊産婦と赤ちゃんケア, 5 (5), 64-68.
- 齋藤佳余子, 二川香里, 松井弘美他. (2015). 高等学校教諭の性教育に抱いている課題と期待—外部支援者との連携の視点から—. 母性衛生, 55 (4), 635-642.
- 産経新聞. (2017). 21歳女子大生に執行猶予付き判決、牧之原の乳児遺体遺棄. Retrieved from: <https://www.sankei.com/article/20171125-CB5QOFAJWFIPATF3LYWGD7PEQ4/> (閲覧日: 2023年10月29日)
- 佐藤いずみ, 中村幸代, 竹内翔子他. (2017). 小学生を対象としたのちの授業を行った看護学生の学び. 横浜看護学雑誌, 10 (1), 36-41.
- 茂木輝順, 久保田美穂, 池谷壽夫他. (2022). 日本の中～大規模中学校の教育課程における性教育の位置づけ—2007年調査と2017年調査の比較—. 現代性教育研究ジャーナル, 136, 1-11.
- 志村智絵, 齋藤益子, 岡潤子他. (2017). 男子看護大学生が行う中学校での性教育の効果. 性ところ, 8 (2), 188-193.
- 鈴木柚衣, 森日香里, 上野奈穂他. (2022). 看護学系大学生の避妊行動に対する意識ならびに実態と性教育との関連. 母性衛生, 63 (2), 483-491.
- 忠津佐和子, 梶原京子, 篠原ひとみ他. (2008). 大学生の性に関する認識の実態とピアカウンセリングへの期待—ピアによる性教育ニーズと教育内容の検討—. 川崎医療福祉学会誌, 17 (2), 313-331.
- 高村寿子編. (2015). 主体的な生き方を支えるピア・カウンセリング実践マニュアル改訂新版: 主体的な生き方を支える. 東京: 小学館.
- 田邊 綾子. (2020). 看護学生が多学年協働で行う中高生への性教育活動に参加することの意義. 日健医誌. 29 (3), 354-362.
- 坪川トモ子, 渡邊典子, 田崎充子他. (2013). 性教育における助産専攻学生による高校生に対するピアエデュケーションの効果. 新潟青陵学会誌, 6 (1), 35-45.
- 植田彩, 佐々木くみ子, 前田隆子他. (2004). 中学生の性イメージと性教育に関する研究—ピア・エデュケーションによる性教育を通して—. 米子医誌, 55, 193-202.
- 上田伊佐子, 高木彩, 川西千恵美. (2011). 性のピアエデュケーションにエデュケーターとし

て参加した看護学生の体験と自己肯定意識の変化. *The journal of nursing investigation*, 9 (2), 1-8.

ユネスコ編 (2018)／浅井春夫他訳 (2020). 改訂版国際セクシュアリティ教育ガイダンス: 科学的根拠に基づいたアプローチ. 東京: 明石書店.